

自然エネルギー100%を実現した大学

大学がサステナビリティに果たす役割

レポート作成：森本 悠人

本稿は2019年7月16日に立教大学で行われた講演会「自然エネルギー100%を実現した大学-大学がサステナビリティに果たす役割-」登壇者：原科幸彦（千葉商科大学学長）に関する報告である。以下にその詳細を記していきたい。

千葉商科大学は、大学として初めて「自然エネルギー100%」を実現した。取り組みの詳細は以下に書いていくが、日本のあらゆる大学が環境やエネルギーの問題に取り組むべきであることが、倫理的判断のみならず経営的な観点から見ても合理的であることが講演会を通して示された。まず倫理的な面について、千葉商科大学の成り立ちから説明がなされた。千葉商科大学の初代学長の理念は、「治道家」の育成であった。治道家とは、大局的見地に立って、時代の変化を捉え、社会の諸課題を解決する、高い倫理観を備えた指導者のことである。この考えは武士道精神＝日本人のモラルの源泉に立脚しており、武士道のキーワードの一つである「仁」は、「誰一人取り残さない」というSDGsの理念と重なっている。同大学のCO₂削減への取り組みの根底には、武士道があるのだ。SDGsやエネルギー問題が私たちの精神風土に関わるものとして認識可能であることがわかった。また、現在、私たちは原発の問題に直面しており、国民の約7割が原発反対を唱えているのだから、自然エネルギーによって脱原発を目指すのは当然の流れのように思われる。千葉商科大学に続いて、あらゆる大学がエネルギー問題に真摯に向き合う時が来ているのではないだろうか。



「自然エネルギー100%」とは「再生可能エネルギー創出量 \geq 電力使用量」のことだが、同大学はその両項目へアプローチした。創エネとして、2013年に同大学の所有している野球場グラウンドの跡地にソーラーパネルを設置した（野田メガソーラー）。その発電容量は2.45MW(2018年2.88MWに増設)であり、大学単体では日本一の規模であった。また、省エネとして様々な取り組みのうちで、特に効果的だったのは学内の照明をLED化したことである。環境のみならず投資回収という経営的な観点からLED化は効果があった。資本主

義システムが優先されがちな社会の中だからこそ、経済的合理性が高い上記のような取り組みは私たちを取り巻く現状を変える有効な手段であると言える。

以上が自然エネルギー100%の実現に向けたハードウェアの部分だが、同大学ではソフトウェア、そしてハートウェアにも力を注いでいる。ソフトウェアでは電力消費・発電などの「見える化・制御」をしている。それによってハードウェアでの工夫がさらに効率化される。ハートウェアは心がけのことで打ち水やグリーンカーテン、省エネ意識を促すなどしている。ハードウェア・ソフトウェアはトップダウンで出来るが、人の意識を変えるのはなかなか出来ることではない。同大学の「治道家」の精神が広く行き届いているからこそ、ハート



ウェアへのアプローチが可能だったのだと思われる。

野田メガソーラー設置に伴って、CUC エネルギー株式会社 (*CUC=千葉商科大学) が設立された。会社を作るという発想が実に商科大学らしい。同社は大学が母体であるが、地域金融機関・行政機関などからの資金で成り立っており、千葉商科大学に省エネ機器のリースなどを行っている。また、学生の発案により、校内に設置されている自動

販売機の台数を減らし、消費電力の削減を図った。企業相手に数字で根拠を示すことによってこの試みは成功したという。他にも「CUC ワイン・プロジェクト」としてソーラーシェアリングでワインを作ることに挑戦している。これらの取り組みの特筆すべき点は、活動が大学内だけで完結していないことである。「自然エネルギー100%」の実現で足を止めずに、地域のステークホルダーを巻き込んで新たな行動を起こしているのだ。

以上のように商業を中心に据えた大学の強みを生かし、千葉商科大学は創エネ・省エネの両面から自然エネルギー100%を実現した。気候変動などの問題を抱えた日本社会にあって、武士道の流れを汲む建学の精神に裏打ちされた千葉商科大学の取り組みは、我々の今後の一つのモデルとなるだろうと思われる。

質疑応答では、ソーラーパネルの技術・コストに関する質問から、「企業や大学が自然エネルギーの活用へと向かうためには、どのように最初の一步を踏み出したらいいのか」、「学生主導で省エネ・創エネ、ひいては社会問題に取り組んでいくにはどうしたらいいのか」など多数の質問があり、非常に実りの多い講演会となった。